



阿久根 賢一



四代目
桂春團治 師匠



認知症であっても、心豊かに暮らせる環境を届けたい。(阿久根)

阿久根 師匠には豊泉家で落語を披露していただいたり、お弟子さん呼んでいただいたりしています。

春團治 僕は若い弟子たちに、認知症の方々の前で落語をやらせてもらうのは、大変な勉強になることやと申しています。微かな反応でもあったら、それを噺家としての喜びとしなければならない。普段の寄席やお客様の雰囲気とは違うわけですが、そこで一生懸命お噺をさせてもらえるのは、とてもいい勉強の機会ですよ。

阿久根 私も豊泉家で噺家さんがあの手、この手で一生懸命にお噺をされている姿を拝見しています。お弟子さんたちは帰って来られた際に、どんな感想を話されていますか。

春團治 普段の寄席などとは違うお客様の前で噺をやっても、どうしようもないわと言うような連中がいたとしたら、そんな者には行く必要がないと申しています。上から目線というか、ずいぶん無礼な心得で行くなら、そんな噺家は豊泉家に伺わせていただく資格はない。どんなお客様にも、たとえ少しでも、喜んでいただきたいと思う。それが、芸人の心得。そのことは、常に指導しています。

阿久根 認知症を有する方でも、笑っている姿はやっぱり印象的なんです。そういう姿を見ると、笑いは本能というか、その人らしさなのかなと思います。

春團治 ホームのフェローの皆さんからは、「反応はわからないかもしれませんが、とても喜んで、楽しんでおられる。」とお聞きしています。反応は微かだったとしても、喜んでいただくため、一生懸命に芸を披露するのが我々、噺家の本分です。

阿久根 どういう反応が返ってくるかわからない方々の前で、お噺をやっていただくのは、噺家さんにとって高度なトレーニングにもなりそうですね。

春團治 トレーニングですし、お年寄りにとっても……、これはおかしいな。オマエも、お年寄りやないかいって(笑)。噺を聞いていただいた方が、少しでも喜んでおられるのであれば、それはなによりです。

阿久根 噺家さんにとっても、ご入居者にとっても、いい関係なんですね。

春團治 それと我々年寄りに、豊泉家の皆さんから言ってほしいのは、「ボケることを、怖がらないでいい」ということ。周りに迷惑をかけるけど、本人はそれを知らないわけですから。本人にとっては、幸せな状態かもしれませんね。ボケないための様々な努力はするべきやけど、ボケること自体はそないに怖がることはないでと。そういう言葉で、ご本人やご家族など、認知症に悩む方々を慰めていただきたいなと思いますね。

阿久根 ある意味、忘れられるのは人生において、素晴らしいことかもしれません。人生で起こったことをすべて覚えていたら、頭がおかしくなるでしょうからね。忘れゆく記憶であったり、出来ていたことが出来なくなっていく恐怖心は、計り知れないものがあると思いますが我々としてはそういった方々をしっかりサポートしていきながら、認知症であっても心豊かに暮らせる環境を届けたいと思っています。